研究論文●19

難治疾患(発達障害，潰瘍性大腸炎，アレルギー，癌)へのホメオパシー応用のケース分析と有効性検証

由井　寅子*

1．はじめに

筆者は英国でホメオパス資格を取り，ロンドンでホメオパシー療法のクリニックを開設し，自閉症などの難治疾患に対して約50%の治癒率を達成していた。その後，1996年に日本で同様のホメオパシー療法を開始したが，単純なケースでは治癒するものの，一時的改善や部分的改善にとどまるケースが多いという現実に直面した。なぜ，欧州で通用した手法が日本で功を奏さないのかと悩み，ホメオパシーの海外での医原病，難治疾患の治癒事例研究[1]や，臨床での様々な試行錯誤の末，薬や予防接種による人工病＝医原病[2,3]が多いことを突き止め，それらの薬を物質がなくなるまで希釈振盪して砂糖玉に垂らしたレメディーを摂らせることで日本での治癒率の向上をみたので紹介する。

2．目的

日本人の難治疾患では，ステロイドなどの強い薬を長年使用し，病理的に複雑になっているケースが多い。日本人の症状の改善率の向上につながるパターンを発見し，ホメオパシーの臨床データの蓄積・整理・分析を行い，難治疾患での治癒メソッドの確立と標準化を行い，4つの疾患の治癒に関する検証およびメソッドの確立を目的とする。

3．方法

1．日本人の症状改善のためのパターン分析

1）薬剤やワクチン，環境汚染物質などの人工毒から作られたレメディーや薬害に合うレメディー[4]が，薬剤やワクチンによる医原病の壁を取り去ることで，中核のレメディーが功を奏する。

2）レメディーのリピートや複数レメディーの複合，複数レメディーの並行使用[5]が，単一レメディーの一度使用(例：1カ月に1回)より，治癒率が向上すると同時に，治癒までの時間を大きく短縮する。

3）抗マヤズムレメディーによるマヤズム治療[6,7](疥癬，結核，梅毒，淋病，癌など，ホメオパシー医学で慢性病の根深い原因)の併用により，難治疾患の治癒率が向上する。

4）栄養・必須微量元素の調節に関係するとされる「生命組織塩」[8]のレメディーや，マザーチンクチャー，臓器サポートレメディーなど[9]の併用が体内老廃物の排泄促進や排泄期間の短縮，苦痛緩和に成果を上げる。

5）ホメオパシーでのトラウマ，インナーチャイルド[10]，感情などのメンタルケアが成果を上げる。

2．代表的な難治疾患の検証

発達障害：急増する発達障害の背景には，予防接種と薬剤の影響がある[11]と仮説を立て，3つの複合リキッド(8種のワクチン＋5大マヤズム複合リキッド，腸サ

*日本ホメオパシー医学協会

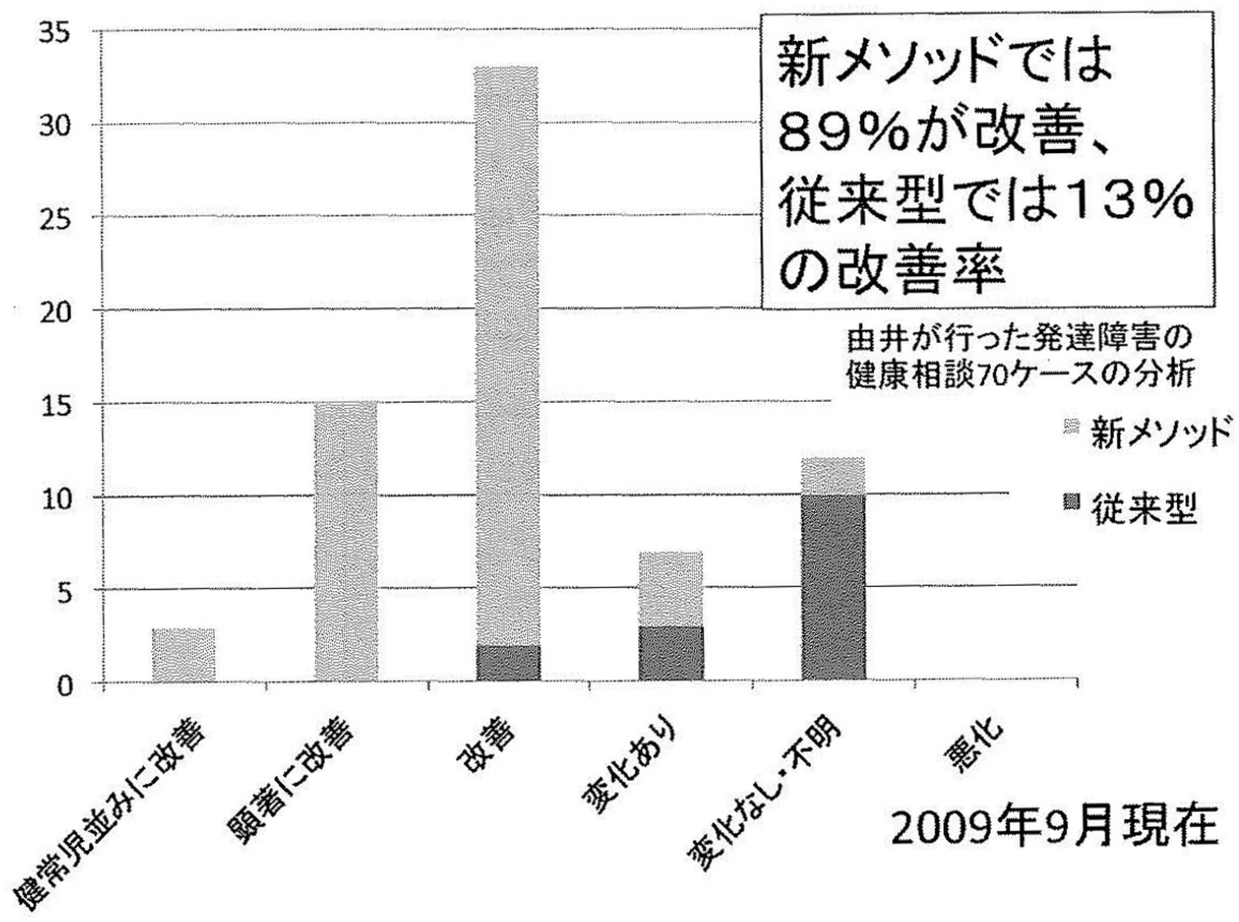

図1　自閉症，多動など発達障害の改善状況の評価

ポート複合リキッド，神経サポート複合リキッド）と，水銀，アルミナや動物蛋白などワクチンに含まれる物質，過去に使用した陣痛促進剤，ステロイド，軟膏類など，薬剤レメディーなどを用い検証を行った[12,13]。

アトピー：急増するアトピーの背景には予防接種と薬剤の影響があると仮説を立て，これまで13年間に健康相談で対応したアトピーを主訴に含むケースにおいて，その改善度合いと，打たれたワクチンや使用されたステロイド剤や抗生物質，抗炎症剤など，薬剤のホメオパシーレメディーの使用状況との関係を分析した。

潰瘍性大腸炎：発達障害，アトピーを参考にメンタルケア，予防接種，薬害出し，マヤズムと貧血対応レメディーを用い検証をスタートした。

癌：昨年，米国立癌研究所では，ホメオパシーが脳腫瘍の治療に有効であることを認め，印ホメオパスであるバナジー氏の論文[14]を昨年ベストケースシリーズとして発表した。日本でも初期の癌への対処や，延命，痛み，ターミナルケアなどではホメオパシー活用である程度の成果を上げている。癌に対し初期から末期までホメオパシーでケアし，治癒率を上げるため，文献調査[15]，臨床経験から，メソッド確立を試みた。

4．結果

1．発達障害

発達障害の症状を主訴とした70例に対し（図1），新メソッド適用前の従来のメソッドでは，15例のうち「健常児並みに改善」および「顕著に改善」が0，改善2，変化あり3，変化なし10と，改善率が13%であったが，新メソッド適用後は，55例のうち「健常児並みに改善」3，「顕著に改善」15，改善31，変化あり4，変化なし2と，改善以上が89%と，従来の改善率13%に比べ飛躍的に向上した。

2．アトピー

ワクチンか薬剤レメディーのいずれかが使われていた場合が，完治および大幅に改善した45例のうち43例，一定の改善がみられた26例のうち20例と高い割合であることがわかった（表1）。一進一退を繰り返した初期のケースなどでは，ワクチン，薬剤レメディーとも使われていないケースも目立った。

3．潰瘍性大腸炎

患者は精神面では完璧主義，自己を責める傾向があり，潰瘍性大腸炎では出血による貧血への対処が必要であり，貧血改善を目的に複合リキッドを作成した。このリキッドで，潰瘍性大腸炎を主訴とした5人中4人はヘモグロビン値などの改善がみられた。

4．癌

乳癌，胃癌など9つの癌おのおのに，これまで単体で癌に成果を上げたレメディーと，英クーパー氏が癌に有効としたマザーチンクチャーを複合した9つのリキッドを開発。加えてホメオパスが，薬や放射線，手術などのケアに合うレメディーを使用する形のメソッドをつくり，一部は医療機関と連携し臨床使用を開始した。

表1　アトピーのケースにおける由井のワクチンおよび薬剤のホメオパシーレメディー使用状況と改善状況

区　分	ケース数	①ワクチンレメディーを使用	②薬剤レメディーを使用	①②少なくとも片方を使用	①②両方を使用	①②とも使用せず
アトピーが完治，または顕著に改善したケース	45	27	39	43	23	2
アトピーがある程度改善したケース	26	15	14	20	9	6
相談会継続中（1～5回）で判定時期尚早のケース	3	0	3	3	0	0
2005年以降まで継続した相談会で，明確な改善まで至らなかった，または改善状況が追跡できなかったケース（効果判定のため，相談回数6回以上のものを選ぶ）	3	3	2	3	2	0
2004年以前に実施された相談会で，明確な改善まで至らなかった，または改善状況が追跡できなかったケース（効果判定のため，相談回数6回以上のものを選ぶ）	11	2	3	4	1	7
合　計	88	47	61	73	35	15

日本ホメオパシーセンター本部にて実施。

改善状況判定は，相談会時のクライアント本人およびその保護者の発言（録画）記録，クライアントからの手紙，カルテおよび写真記録などを参考に，相談会を担当した日本ホメオパシーセンター各本部の責任者の判断を入れ，総合的に検討し判定した（1997～2009年に実施した，主訴がアトピーの健康相談を対象とした）。

5．考察

ホメオパシーは200年以上の歴史があり，1種類のレメディーを1粒摂って長期間（1カ月ほど）待つという単一投与の原則が創始者ハーネマンの原則として信じられ，世界の大勢を占めているが，実際はその方法は，ハーネマンの主要著書である『オルガノン』の第4版の英語版をもとに学んだケントの方法であり，ハーネマン自身はオルガノン第5版～第6版[16]において，従来の方法では慢性病を治癒に導くことはできないこと，反復投与の重要性を説いている。また，コンビネーション投与の有効性を認識していたが，政治的理由により第5版から削除されたことがわかっている。また，実際のハーネマンの処方から，反復投与，複数投与を実践していたことが最近の文献研究から明らかになってきている。

このことを踏まえ，イギリスと日本での治癒率の違いから，試行錯誤の末，今回複合レメディーという手法を用いるに至った。伝統的な植物・鉱物などのレメディーや生命組織塩や臓器サポート，薬剤やワクチンなどのレメディー，メンタルケアのレメディーなどを使用した。

ホメオパシーは，病気の原因となった同種の物質を薄め活性化して作られたレメディーにより，自己治癒力が発動し治癒に向かう療法であり，同種療法の観点から疾患の原因の可能性を見出せる療法である。よって発達障害やアトピーでは，ワクチンや薬剤が疾患の原因の1つである可能性を示したことになる。

また，副腎皮質ホルモンなどでアトピーを抑えた者は的確なレメディーが入ったとしても，症状が一進一退と長期に苦しむケースが多くみられる。薬剤で皮膚疾患を抑えた場合には，体毒や薬物が体の中に残っているためクライアントの使った薬剤のレメディーを使うことによって自己治癒力が動き，排毒を促すことで，苦痛緩和や治癒期間短縮の効果もあることがわかった。海外でもホメオパシーの従来手法ではアトピー治癒には数年を要するとされるが，治癒までの期間短縮が可能となり，クライアントのQOL向上につながると考える。

潰瘍性大腸炎，癌に関しては，発達障害，アトピーの実績を踏まえ，メソッドを確立したところであるので，今後実績を積み上げていきたい。

難治分野でのホメオパシーの可能性は大きく，この分野での発展に貢献するため，個々の疾患別の対処メソッドを早期に確立し，治癒実績データを積み重ねることが

られている。これから統合医療の中でホメオパシー核となる療法として活用されていくためには，ホメシーの側でも学術研究活動の強化，専門家育成・教強化などを実践していく必要があると考えている。状を抑えることなく出し切ることで体内老廃物は溜ず健康になっていく，症状を病気として薬で抑えるによって体内老廃物がさらに溜まり，より様々な難なっていくと考えている。

文　　献

ジャン・エルミガー：真の医学の再発見　ホメオパシーの新たな地平線，ホメオパシー出版，東京，2008.

J・コンプトン・バーネット：ワクチノーシス，ホメオパシー出版，東京，2006.

由井寅子：予防接種トンデモ論，ホメオパシー出版，東京，2008.

マリオ・ボヤジェフ：ホメオパシーの理論と実践　システマティック・アプローチ，pp. 43-51，ホメオパシー出版，東京，2006.

ルディ・バースパー：ホメオパシールネッサンス―クラシカルを超えて―解明されたホメオパシーの真実，ホメオパシー出版，東京，2008.

サミュエル・ハーネマン：慢性病論(第2版)，ホメオパシー出版，東京，2009.

7）スブラタ・クマー・バナジー：マヤズム治療のための大事典，ホメオパシー出版，東京，2009.

8）ザビーネ・ヴァッカー：生命組織塩でバランスをとる，ホメオパシー出版，東京，2008.

9）マシュー・ウッド：バイタリズム　類似の法則と植物レメディーの系譜，ホメオパシー出版，東京，2009.

10）由井寅子：インナーチャイルドが叫んでいる！，ホメオパシー出版，東京，2009.

11）J・コンプトン・バーネット：発達障害の子どもたち―ホメオパシーで治癒可能な身体的・知的発達の遅れた子どもたち，ホメオパシー出版，東京，2008.

12）由井寅子：8種類のワクチンとアルミニウム，水銀などのホメオパシーレメディーの使用と発達障害の改善について．日本未病システム学会雑誌　**14**：160-163，2008.

13）由井寅子，発達障害へのホメオパシー的アプローチ，ホメオパシー出版，東京，2008.

14）Banerji, P., Campbell, D. R. and Banerji, P.：Cancer patients treated with the Banerji protocols utilizing homoeopathic medicine：A Best Case Series Program of the National Cancer Institute USA. Oncol. Rep. **20**：69-74，2008.

15）ロジーナ・ゾンネンシュミット：ホメオパシー　癌のレパートリー，ホメオパシー出版，東京，2007.

16）サミュエル・ハーネマン：医術のオルガノン(第6版)，ホメオパシー出版，東京，2007.